八重山天狗どんと甲突川ガラッパさんのおはなし

むかしむかしのおはなしじゃ。さつまのくにの郡山（こおりやま）というところに、まことに人なっこい天狗（てんぐ）どんがすんでおった。この天狗どんは、山で村びとにであうとおもしろいことをしてわらわせたり、ねがいごとをかなえてやったりしておったそうじゃが、そのたんびに畑（はたけ）でとれたばかりのやさいをもらったりしておったそうな。

その天狗どんがすむ山のふもとには、たいそうおいしい水がわきでる小さな池があったそうな。

あるときのこと、はじめて天狗どんが、ふもとにおりてあそんでおったところ、なにやらとおくにうごいているものがみえた。いったいなんだろう、と、ふしぎにおもった天狗どんは、近づいて木の上にかくれ、そーっとのぞきこんだ。すると、それはそれは

うつくしいすがたをしたガラッパさんが、そのおいしい水のわきでる小池で、「ヒーヒョロヒッヒ♪　ヒーヒョロヒッヒ♪」と、うたいながら手で水をすくっては頭にかぶり、手で水をすくっては頭にかぶり、くりかえし、くりかえし、おいのりをしておったそうな。

いつもは、なんでもわかってしまう天狗どんじゃったが、このガラッパさんのことだけは、さっぱりわからなかった。そこで、ついつい、かんがえこんでしもうた。そして、ふと気がついて小池をみると、もうそこには、ガラッパさんのすがたはなかった。びっくりした天狗どんは、あちこちみまわしたり、そらからみつけまわしたりしたそうじゃが、どこにもガラッパさんはみつからんかったということじゃ。

しかたなく天狗どんは、小池をなんども、なんどもふりかえりながら、山へかえっていったそうな。山へかえっても天狗どんは、ガラッパさんのことをなかなかわすれることができなかったそうな。

そこで、夜があけるのもまちきれず、ガラッパさんをみた小池にまたでかけていった。やがて夜があけ、一日じゅうまってもガラッパさんは、とうとうすがたをみせなかったそうな。

それでもあきらめなかった天狗どんは、なん日も、なん日も、小池にでかけて、ガラッパさんのあらわれるのをまっておったということじゃ。

それから一年ほどたったある日のこと、あのときのガラッパさんが、ひさしぶりに、

「ヒーヒョロヒッヒ♪　ヒーヒョロヒッヒ♪」と、うたいながら、あのときとおなじように、おいのりをしておったそうな。

そのすがたをみながら、天狗どんは、おもいました。『こんどは、ガラッパさんとはなしをして、わけをきいてみよう』と、そこでおいのりがおわるのをまっことにしたそうな。

ところが、ガラッパさんは、おいのりがおわると小池の中にスーッときえてしもうた。天狗どんは、小池の中をうらめしそうにのぞきこんで、「あ　あ、いちどでいいからガラッパさんとはなしをしたいもんだ」と、ためいきまじりにつぶやいたそうな。

「でも、一年まつとあのガラッパさんが、かならずこの小池にやってくることがわかっ

ただけでもいいや」、そう自分をなぐさめ、がっかりした足どりで山へかえっていった。

そして、また一年まつことにしたそうな。

それから一年たったある日のこと、天狗どんは、朝はやくからガラッパさんがあらわれるのをたのしみに、ながいことまっておった。まっておったかいがあって、やっとあのガラッパさんが、すがたをあらわしたそうな。

天狗どんは、こんどこそガラッパさんがきえてしまわないうちに、はなしをしようと、ガラッパさんのまえに仁王立ち(におうだ)になり、「ど、どうしてここで、お、おいのりをしているのですか?」と、あわてて話(はな)しかけたそうな。

ところが、びっくりしたガラッパさんは、ひっくりかえってしまい、なにがなんだか

さっぱりわからなかったそうな。

しばらくして、おちついたガラッパさんをみて、天狗どんは、身ぶり手ぶりでもう一回、話しだしたそうな。ガラッパさんは、やっと意味(いみ)がわかったらしく、「わたしは、ここからわきでるきれいな水のおかげで、いのちをさずかっているものでございます。まだまだ、この川のあちこちには、たくさんのものたちが、わたしとおなじように、このこの水のおかげで、いのちをさずかっているのです」と、おしえてくれたガラッパさんのことばが、ふしぎなことにはっきりとわかったそうな。

そこで、天狗どんは、やっとガラッパさんが、ここにきておいのりをしていたわけがわかったということじゃ。

そこで、こんどは、天狗どんが、「わたしは、この山にすんでおって、この山をまもっている山の主です。二年ほどまえ、あなたをこの小池でみかけていらい、あなたのことが気になり、なぜここでおいのりをしているのか、そのわけをききたくて、こうしてきょうのこの日をまっていたのです。そして、そのわけをしり、ふかく心をうたれたのです。じつは、わたしは、この山のみどりをまもるために山に雲をよび、雨をふらせているのです。その雨がふもとのこの小池にあつまり、川となって、たくさんのものたちのいのちをまもっていることをしり、おどろいているのです。」と、話をしたそうな。

それから、天狗どんは、ガラッパさんを自分の家にあんないすることにしたそうな。もちろん、ガラッパさんもよろこんであんないしてもらったそうな。

とちゅう、けわしいいわ山や、ぜっぺきの谷をとおらなければならなかったけれども、ふたりはなかむつまじく、かたりあいながら山をのぼっていったということじゃ。

そして、ちょうじょうの天狗どんの家についたとき、ガラッパさんは、おもわず「なんてすばらしいながめでしょう」と、大声でさけんでしもうたそうな。

それはガラッパさんにとって、うまれてはじめてみるゆめのようなけしきだったからだそうな。

そして、ふたりは山のこと、川のことなどをはなして、たのしくあそんだあと、ガラッパさんがふもとの小さな池におれいまいりにきたとき、かならずあうことをやくそくして、ガラッパさんは山をおりていったそうな。

ガラッパさんとわかれ、山にかえった天狗どんは、その夜、たのしくすごした一日をおもいだして、なかなかねむれなかったということじゃ。

こうして、天狗どんとガラッパさんはしりあうようになり、いつもガラッパさんがきたときの山は、にぎやかでお祭りさわぎのようのようになったそうな。

そして、いつしかふうたりのあいだに、かわいい男の子がうまれたそうじゃ。ふたりは、こどものなまえを花鳥の山のかみさまに、おねがいにいったところ、『天狗どんの天と、ガラッパさんのガラをとって、天ガラもんとなづけなさい』との、おつげをいただいき、さっそくふたりは天ガラもんとなづけ、とてもだいじにそだてたということじゃ。天ガラもんは、やんちゃではあったけれども、親こうこうで、やさしい心をもった

こどもにそだっていった。そして、おおきくせいちょうした天ガラもんは、父おや、母おやをたすけ、この山と、この小さな池をまもりつづけたということじゃ。

そのおかげで、この山は、おおくのひとびとのいこいの場所(ばしょ)として、またこの小さな池の水は絶えることがなく、川しもにすんでいるひとびとのいのちをまもりつづけているということじゃ。

そこで、このさとでは、このはなしをだいじにして、天狗どんのすんでおった山を、天狗どんがもっていた八手(やつで)にちなんで八手山(やつでやま)、のち八重山(やえやま)、ガラッパさんがおれいまいりにきておった小さな池を、神の使いの池、神使池(こうつかいいけ)のち甲突池(こうつきいけ)とよぶようになり、そこから流れている川を甲突川(こうつきがわ)とよぶようになったというはなしじゃ。

今でも八重山と甲奥池には、天狗どんとガラッパさんが、天ガラもんをつれて、ときどきあらわれ、ねがいごとをかなえてくれるそうじゃ。

創作者　きがき　寛（かん）
問合せ　090739843390